

薩摩焼貝目小考

——その存続年代の考古学的検討——

渡 辺 芳 郎

はじめに

南九州の近世陶磁器である薩摩焼には、しばしば「貝目」と呼ばれる二枚貝の痕跡が、製品の口縁部や底部に見られることがある。これらは、製品を重ね焼きする際に製品同士の融着を防止するための緩衝材として、あるいは焼台として、貝を使用した結果と考えられる。

一般に薩摩焼の貝目は、苗代川系陶器の古い段階に見られる技法と認識されている。しかし「古い」と言っても具体的にどの年代を意味するのか、研究者によって意見がやや異なっている。そこで本稿では、薩摩焼における貝目を持つ考古資料を抽出し、その暦年代を共伴資料などを参考にしながら推定し、貝目の存続年代について、一考を試みたい。

1 貝目技法について

まず本稿では、製品の口縁部や底部に見られる貝の痕跡を「貝目」、貝を用いて重ね焼きをしたり、貝を焼台として用いる技法をまとめて「貝目技法」と呼んでおきたい¹⁾。

貝目技法に用いられる貝の種類は、『薩摩焼の研究』（田沢・小山 1941 以下『研究』と略称）においてハマグリ・ハイガイ・サルボウが挙げられている。また山元窯跡では、扁平なイタヤガイが用いられていることが報告されており（関編 1995 p. 108）、このほか種子島の能野焼ではトコブシを用いるとされて

いる（向田 1978 p.143）²⁾。

貝目が残る部位としては、おもに甕や壺、鉢・播鉢など、いわゆる「薩摩黒物」の口縁部・外底底部・内底底部・胴部などである。

口縁部の貝目は、窯詰の際、製品の口同士を重ねる「合わせ口」の痕跡と考えられ（図1-1）、関一之は、それが「匣鉢」としての機能をも併せ持っていた可能性を指摘している（関編 1995 p.108）。

それに対して底部の貝目はふたつの場合が考えられる。ひとつは、焼台の上あるいは窯床面に直接貝を置き、その上に製品を正置した場合である（図1-3）。もうひとつは、播鉢や甕などの内底底部にも貝目が見られることから、図1-2のような正置による重ね焼きの場合である。また先述したように、合わせ口で匣鉢として用い、なおかつ内部の製品底部に貝を置いた場合にも、内底に貝目が残ることがあるであろう（図1-1）。なお播鉢の内底底部の貝目は、その後の使用により摩滅し、残ってない場合も想定される。

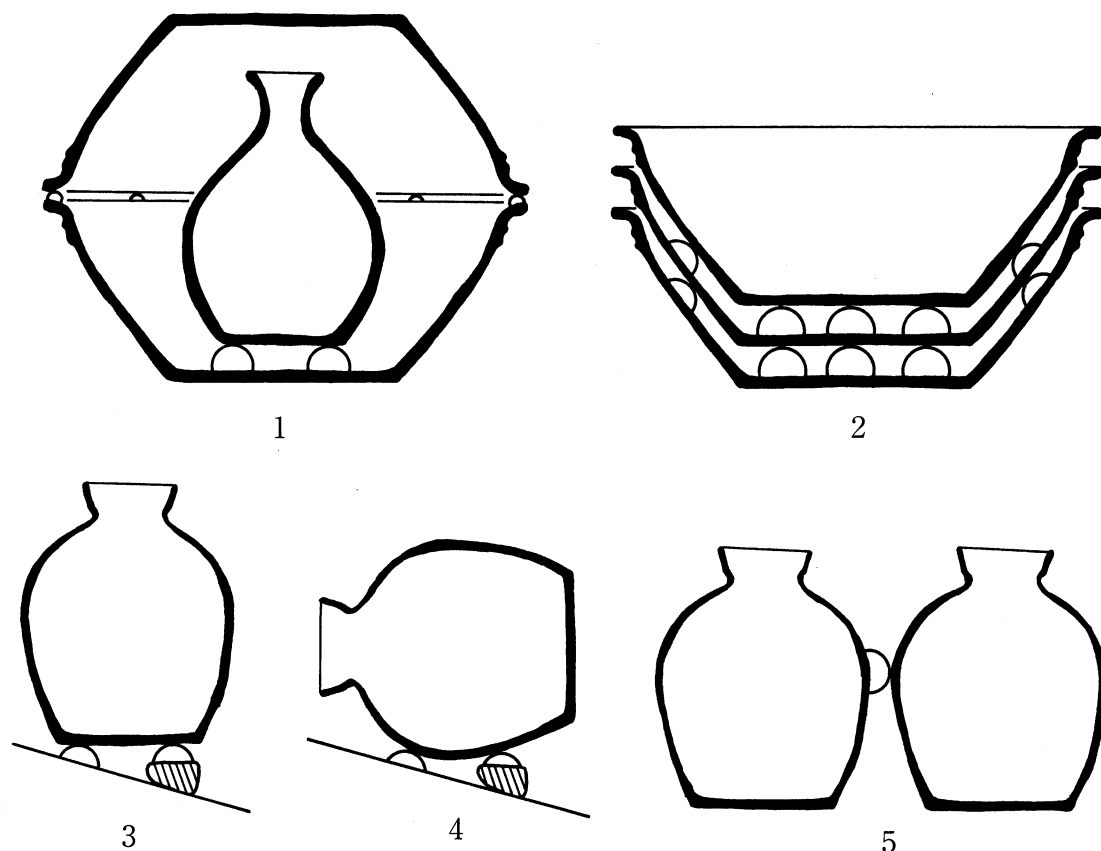


図1 貝目技法想定模式図

胴部に貝目が残る例は、いくつかの置き方が想定できる。ひとつは前述の、播鉢などを重ね焼きする際に、製品胴部に補強として差し込む場合（図1-2）、ふたつめは甕や徳利などを横置するときに焼台として用いる場合（図1-4）、三つめは窯内部で製品同士が接触することを避ける場合である（図1-5）。

以上の貝目技法は、製品に残る貝目を手がかりとして想定したものであり、窯跡からの融着資料などで検証していく必要がある。

ところで、貝目には、貝殻の「背」の部分が残っている場合と、「縁」の部分が残っている場合とがある。「縁」を下にした方が安定性があり、前述したような合わせ口の重ね焼きなどの場合には、「縁」の目跡が残るものが下、「背」の痕跡が残るものが上と判断できないこともない。ただし、焼台に「背」の部分が残る例もあり、その場合は、「背」が下、「縁」が上に置かれたことになる。また外底底部に、「背」と「縁」の貝目が共存する場合もある。一方、山元窯のように扁平なイタヤガイの場合は、上下を区別して使い分ける必要はないであろう。貝の置き方に一定の規則性があったのかどうかは、類例を蓄積することで検証されよう。

2 貝目技法の年代観—研究史—

薩摩焼における貝目への注目は、『研究』において見られる。該書では、申木野窯・元屋敷窯・堂平窯において貝目は見られるが、寛文9年(1669)に開窯したと推定される五本松窯以降の窯では貝目は見られないとしている (p. 181)。また堂平窯跡出土の「黒物手」には、貝目を持つ「第一類」と、貝目を持たない「第二類」とがあり、さらに堂平窯は、「朝鮮系単室傾斜窯」である「堂平古窯」と、「肥前系連房式登窯」である「堂平新窯」の新古2種があったとし、堂平古窯から新窯への転換を、五本松窯開窯とほぼ同時期と推定している (pp. 175-179)。『研究』では「黒物手第一類」「第二類」と「堂平古窯」「新窯」との関係については明示していないが、第二類は五本松窯製品に類似していること、五本松窯と堂平新窯の開窯に、豎野窯の陶工・星山嘉入 (1649-1721) が関係

していると想定していることなどから、「黒物手第一類」=「堂平古窯」, 「第二類」=「堂平新窯」と考えていたと推測される。そうすると、貝目技法は、五本松・堂平新窯開窯時、つまり1660年代末~70年代において姿を消したと理解していたと推定されよう。

しかしその一方、宝永元年(1704)に苗代川から陶工が移住して開窯したとされる鹿屋市笠野原窯跡でも、貝目をともなう陶片が採集されている(『研究』pp. 197-198)。このことは、18世紀初頭の笠野原窯⁴⁾において貝目技法が用いられていたことを意味するだけでなく、その時期まで苗代川系の窯場においても貝目技法が存続していたことを示唆する。田沢・小山らは、製品の共通性などから、笠野原窯と堂平窯との関係が密接であったと推測しているが(p. 198)、彼らの窯の操業年代観によれば、この年代の「堂平窯」は「堂平新窯」の時期にあたる。「黒物手第二類」=「堂平新窯」と理解するならば、苗代川の貝目技法と笠野原のそれとの間に年代的齟齬が生じることになる。先述したように、『研究』では堂平窯の2種類の黒物手と古窯・新窯との関係を明示していないため、田沢・小山らの貝目技法の年代観については、あいまいな部分が残っているといえよう⁴⁾。

ついで佐藤進三が調査した加治木町御里窯跡においても、貝目を持つ甕片が出土しており、苗代川系以外の窯場でも貝目技法が用いられていたことがわかる(1943 p. 24)。このことはまた、貝目技法が、薩摩に渡来した朝鮮陶工にある程度共通した技法であったことを示唆していよう⁵⁾。

向田民夫は、貝目技法は享保年間(1716-1735)の初期まで盛んに使用されたと考えているが、その論拠は明示していない。また種子島の能野焼における貝目使用について、新野稔明の見解を紹介し、享保11年(1726)銘の四耳壺に貝目が見られるといい、「寛政(1800)以後まで存在したといわれている」としている(1978 pp. 142-143)。

また山口丹海(1979)は、「島平窯」(串木野窯のこと)の「貝高台」について触れた部分で、「二枚貝特に赤貝の殻を四枚揃えて並べ、その上に焼物を置く古い形式で、江戸中期まで使われた」(p. 158)としている。「江戸中期」と

は18世紀を指すかとも思われるが、ややあいまいであり、またその根拠については書中に探し得なかった。

一方、野元賢一郎（1982・1985）は、『研究』の成果に基づきつつ、堂平窯の開窯年代を慶安2年（1649）頃とし、「次の新堂平窯に移るまでの元屋敷、堂平時代は貝殻による貝目を底足、器物間の融着防止に使い、以後は短冊形のコマや団子の土目を使っている」（1985 p. 19）としている。氏の窯の操業年代観によれば、五本松窯については、『研究』と同様、寛文9年（1669）開窯とし、また新堂平窯は堂平窯閉窯後の寛文12年（1672）頃の開窯としている。つまり苗代川における貝目技法は1660～70年代までと認識されているようである。実際、氏が全体的な監修を行った『さつまやき—その歴史と多様性—』展図録（鹿児島県歴史資料センター黎明館編 1985）では、貝目を持つ資料は、19世紀とされた1例をのぞき、すべて17世紀に比定されている。ただし同氏の編んだ「薩摩焼年表」（1984）では、笠野原窯における貝目の存在を示しており、先に指摘した『研究』と同様の問題を含んでいる。

また出口浩は、前述の向田民夫の年代観に触れつつも、唐津焼において貝目が17世紀初頭の技法であることを傍証としたうえで、貝目を持つ甕・鉢・播鉢を17世紀前半代に比定している（出口・濱川編 1992 p. 46）。

その後、加治木町山元窯跡が発掘され、イタヤガイの貝目を持つ播鉢などが出土している。山元窯の操業年代については異説はあるものの、ほぼ1660～70年代頃と考えられており、17世紀中葉～後葉において貝目技法が使用されたことがうかがわれる（関編 1995）。また報告者は、山元窯の系譜を引き、従来貝目技法のないとされていた龍門司焼についても、その有無を確認するよう注意を喚起している（p. 113）。

下山覚は、貝目技法が18世紀以後も「古器の技術伝承」として微量ながら用いられていた可能性を考慮に入れつつ、日常雑器については17世紀代という年代観を示している（下山編 1996 p. 24）。

1998年鹿児島県歴史資料センター黎明館において、「薩摩焼発祥400周年記念展」として『世界のさつま』展が開催された。同展図録（鹿児島県歴史資料セ

ンター黎明館編 1998) 中の野元賢一郎の論考(1998)では、それまでの見解がほぼ踏襲されているが、その一方、山下廣幸らによって編集された図録中において、1985年の図録で17世紀に比定されていた貝目資料が18世紀前半に引き下げられている点は注目されよう。ただし伝世品の場合、日常的に使用・消費される日用品と異なり、下山が指摘するような「古器の技術伝承」あるいは古い技法の一時的採用という可能性も考えられ、一般的な貝目技法の存続年代を反映しているかどうか、慎重な判断が必要であろう。

以上見てくると、貝目技法の年代については、17世紀の特徴と考える見解と、18世紀まで下るとする見解が示されているといえよう。では考古資料においてはどうか、以下、大龍遺跡の資料を中心に検討を加えたい。

3 大龍遺跡出土の貝目資料とその年代

近年、近世考古学、とくに近世陶磁器の考古学的研究の進展は著しいものがあるが、薩摩焼に関しても、従来の美術史的・文献史的研究だけでなく、考古学的関心が高まりつつある。それは、阿久根市脇本窯跡(阿久根市誌編さん委員会編 1974 pp. 996-1001)・鹿児島市堅野冷水窯跡(戸崎他編 1978)の発掘調査を嚆矢として、加治木町山元窯跡(関編 1995)・御里窯跡(1995年)・弥勒窯跡(1997年)、始良町元立院窯跡(下鶴編 1995)、東市来町堂平窯跡(1998年)の発掘調査や、川内市平佐焼窯跡の分布調査・発掘調査(1999年)などに現れている。一方、鹿児島(鶴丸)城本丸・二之丸跡(戸崎・吉永編 1983, 出口編 1984, 諏訪・弥栄編 1991, 弥栄編 1992)や、鹿児島城下町の発掘(出口編 1992, 出口・濱川編 1992a・bなど)なども実施されており、消費地における発掘資料の蓄積も進められている。

そのうち大龍寺跡である鹿児島市大龍遺跡では、近世から近代にかけての土坑群が多数検出されており(本田・下山編 1986, 出口編 1992)、各土坑からは、薩摩焼とともに、肥前磁器、京焼などの他地域の製品が共伴して出土している。薩摩焼の編年は、現在構築途上にあり⁶⁾、そのためには、薩摩焼そのものの型

式学的研究とともに、他地域の編年を参考にして、それらと共伴する薩摩焼の年代を推定していくことが必要である。それゆえ、この大龍遺跡の資料が、薩摩焼の年代推定に果たす役割はきわめて大きいものであることを強調しておきたい。また今後、このような土坑一括資料の増加が望まれる。

そこでまず、大龍遺跡第7次調査（出口編 1992）の資料のうち、貝目をもつ薩摩焼を出土する土坑を抽出する⁷⁾。そしてそれら出土した土坑の共伴遺物について、肥前や江戸、京焼などの編年案を参考にしながら⁸⁾、土坑の年代について推定を試みたい。そのうえで、貝目の存続年代について私見を述べたい。

大龍遺跡第7次調査において、貝目を持つ製品を出土した土坑には、以下のものがある。

土坑 No. 25 (図2)⁹⁾

外底底部に貝目を持つ播鉢(4)が出土している。そのほかせんじ碗に近い形態の色絵碗(1)が共伴しており、京焼におけるせんじ碗は1720～60年代に位置づけられている(鈴木 1999 p. 41)。肥前の京焼風陶器においても、せんじ碗は18世紀前半の窯から出土している(大橋 1989 p. 15)。また現川焼の碗(3)も出土し、現川焼が18世紀前半に操業された窯であることから、この土坑の年代は18世紀前半以降と推定される。

土坑 No. 71 (図3)

外底底部に貝目を持つ植木鉢(20)が出土している¹⁰⁾。18世紀前半の現川焼の碗(12)とともに、18世紀後半から19世紀初頭とされる筒形湯飲み茶碗(4)(西田・大橋 1988 p. 146)、18世紀後半から流行する菊花文(西田・大橋 1988 p. 56)を描いた高坏(6)、18世紀後半と思われる渦福(鈴田 1995 p. 273)を高台内に描く碗(2)などの磁器が共伴する。そのほか乳白色釉に見込み蛇の目釉剥ぎをした龍門司系の鉄絵鉢(16)、元立院系と思われるどんこ釉の花瓶(18)や三島手の碗(17)などが共伴する。

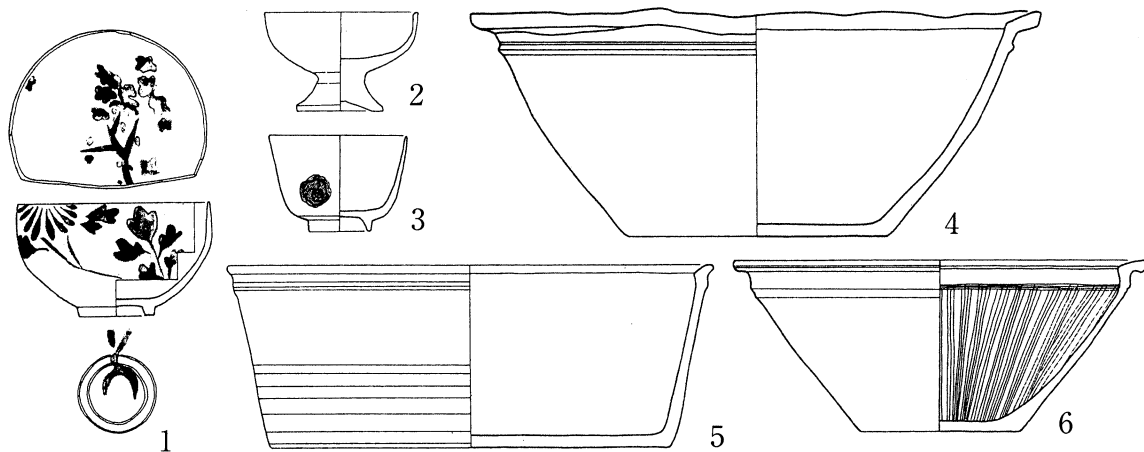


図2 大龍遺跡・土坑 No. 25 出土遺物 (S=1/6)

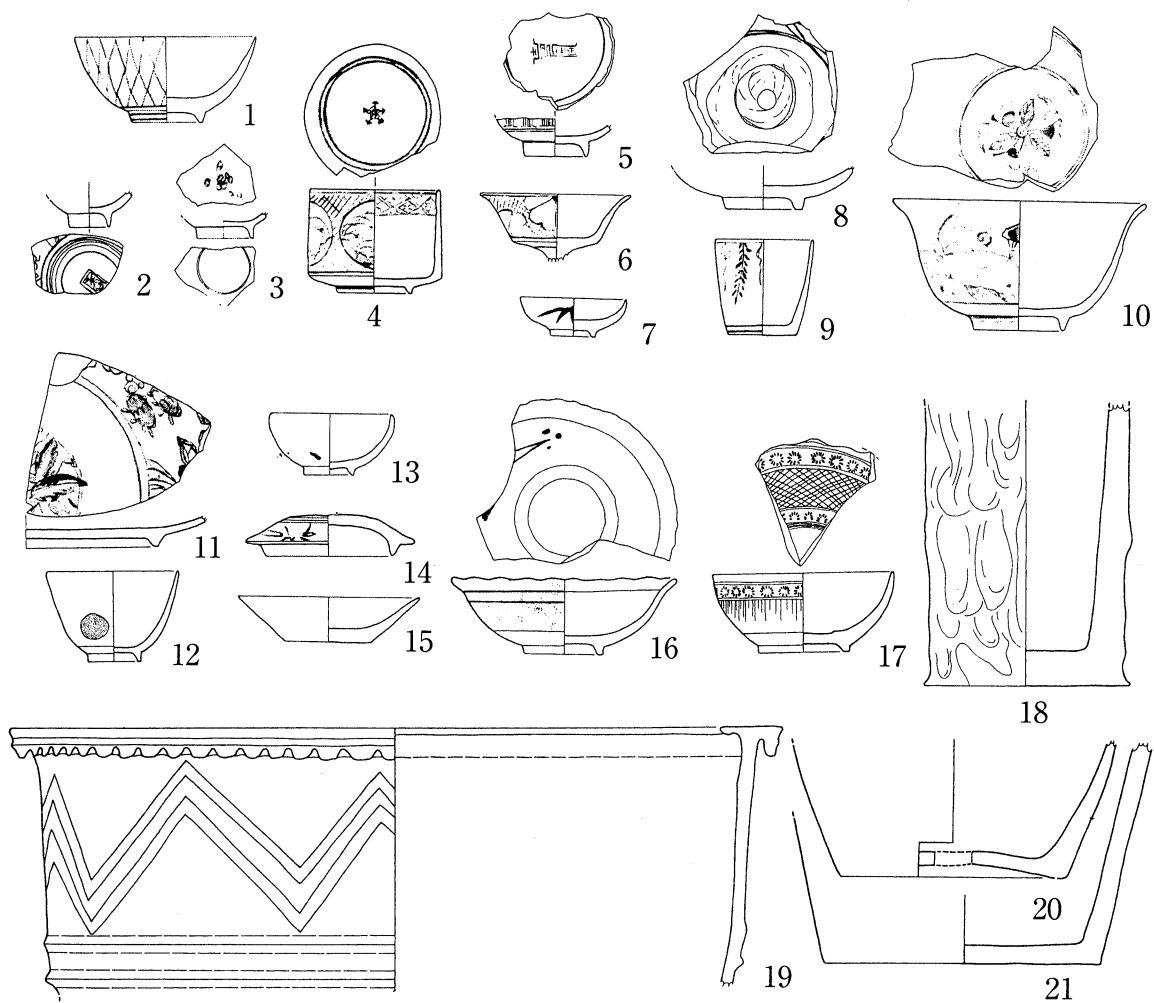


図3 大龍遺跡・土坑 No. 71 出土遺物 (S=1/6)

